

大 学 図 書 館 問 題 研 究 会 京 都

URL : <http://www07.u-page.so-net.ne.jp/rg7/dtkk/index.htm>

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町 34 京都橘女子大学 企画調査課 田北十生気付

(Tel) 075-574-4112 (Fax) 075-574-4151



大図研京都セミナー2001

「ネットワーク環境下における図書館サービス」

連続5回（4月～8月）好評のうちに完了！

今シリーズの最後、第五回セミナーは、8月4日（土）に京都アスニーで開催されました。参加者は、セミナー参加者 30 名（当日キャンセル 9 名、当日飛び入り 4 名）でしたが、今シリーズ中もっとも熱気あふれる有意義なセミナーとなり、連続セミナーの最後を飾るものとして、ふさわしいセミナーになりました。

この第5回セミナーは、3名の方から研究発表をしていただきました。発表者と発表の概要は、次ページのとおりです。また、それぞれの発表についての感想を参加者からいただきました。その感想文は3ページ以降に掲載しています。

支部委員会として、今回の「ネットワーク環境下における図書館サービス」を統一テーマとしたセミナーを振り返ると、会員のみなさんの要望に応えた計画であったこと、それが今回の成功につながったと思います。

また、参加された方の中には、京都支部以外からの参加もあり、且つ、会員以外の方も参加もありました。そういう意味では、大きな広がりを見せたセミナーであったと思います。

【重要なお知らせ】

6月の総会で支部費が改定となりました。

支部費（年間）1,000円→2,000円に！
従って、納入額合計は、大図研年会費と合わせて7,000円となります。

会員の皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

大図研京都支部委員会



目次	大図研京都セミナー 2001 好評のうちに完了!1頁
	大図研京都セミナー第5回概要.....2頁
	第5回セミナー感想（藤原氏）.....2頁
	第5回セミナー感想（秋山氏）.....3頁
	第5回セミナー感想（村上氏）.....4頁
	第4回セミナー感想（大館氏）.....5頁
	第4回セミナー感想（中島氏）.....6頁
	第3回セミナー感想（井上氏）.....7頁
	第2回京都支部委員会の報告.....8頁

ご意見・ご要望、投稿はメール、又は FAX で
編集気付（dkamr302@kyoto.zaq.ne.jp）takita まで

大図研京都セミナー2001

「ネットワーク環境下における図書館サービス」

第5回個人研究発表（発表テーマと発表者）

1. 「主に女性研究者の改姓・旧姓とデータベースについて（仮称）」
江上敏哲氏（京都大学附属図書館）
2. 「私立大学図書館におけるアウトソーシングの現状」
木下祐子氏（立命館大学衣笠メディアサービス課）
3. 「標準化：ネットワーク環境を活かすために（仮称）」
大綱浩一氏（国立情報学研究所開発・事業部アプリケーション課）



第5回セミナーに参加して（感想1）

藤原 由華

私は普段レファレンス業務に携わっていますが、今回の発表を聞くまで、このような問題が存在することを全く意識していませんでした。そのために、実は存在する資料を発見しそこねていたこともあるのではないかと、反省しきりです。

江上さんが「合理的なネットワーク環境と非合理的な現実社会との橋渡し役をするのが図書館員の務め」とおっしゃっていたのが、とても印象的でした。それを一番意識すべきなのがレファレンス業務であるはずですが。

データベースの類は「誰でも簡単に」検索できるのが長所ですが、その簡単さゆえの落とし穴があることは、日々の業務で実感しています。本当は存在するのに、検索の仕方がまずいために探し出せず、「存在しない」と思いこむ利用者が結構多いのです。かく言う私自身も、そのような苦い経験を何度もしています。今回のようなケースは、その中でも難度の高い例と言えるでしょう。図書館員はデータベースの特性を熟知して日々の業務で利用者を助けるとともに、利用者教育の必要性もますます高くなっていると思います。

江上さんのHPを見ると、国家公務員が旧姓の使用を認められるなど、制度的にはどうやら良い方向へ向かっているような感じですが、まだ根本的な解決に至るまでには時間がかかるでしょうし、収録済みのデータが修正されることもないでしょう。今回の発表によって、日本の女性研究者の置かれている不合理な状況に目を開かされるとともに、図書館員としてすべきことを教えていただきました。

ふじわら・ゆか（京都大学附属図書館参考調査掛）

第5回セミナーに参加して（感想2）

立命館大学総合情報センター アウトソーシング業務
—資料整理・目録業務を中心に— を聴いて



秋山 千奈美

「アウトソーシング」という言葉を初めて聞いたのは、今から3年ぐらい前だったでしょうか。そのころは耳慣れない言葉でよく「アウトソーシング」と言い間違っておられた方もいました。そのころから急速に話題になりはじめ、今日では当たり前のように使っている言葉です。私が勤務しているところでも、今年の4月より業務の一部をアウトソーシングしました。そのこともあり、3本の報告の中で一番興味を持っていたテーマでした。

さて、今回の報告では「資料整理・目録業務を中心に」ということでしたので、NACSIS-CATの存在が大きなテーマであると思います。NACSIS-CATを利用するようになって目録に習熟していなくても目録をとることができるようになりました。遡及入力等で、書誌ダウンロード・所蔵登録を主に業務を行う場合、必ずしも経験豊富な図書館員が行わなくても、十分業務は行うことができます。

アウトソーシングをしていなくても、アルバイト等の臨時職員で遡及入力を行っているところも多いのではないのでしょうか。反対に、書誌登録時には標準化された目録をとらなければならない、図書館の独自性を殺した目録をとらなければならないようになってきているように思います。

他方、図書館がインターネット上で公開している蔵書検索では、独自性も出していきたい、というのが図書館員の思いでしょう。アウトソーシングを行うに当たって、NACSIS-CATの存在は大きなメリットだと考えます。というのも、標準化された目録業務経験者を得やすいということです。独自性を重要視するとアウトソーシングは無理かもしれませんが、少々ことは目をつぶれば目録業務は一番アウトソーシングしやすいところだと思います。

私をもっと聴きたかったのは、資料整理・目録業務のところで予算管理をどのようにされているか、業務のチェックをどのようにされているか、利用者サービス部門でのアウトソーシングをどのように考えているか、というところです。「ネットワーク環境下における図書館サービス」という今回のテーマからは多少はずれますが、専任職員がどのような役割を持って業務を遂行しているのか先行大学の事例を聴きたいというのが本音です。次回のテーマにでもしていただけたらと思います。

最後になりましたが、国立大学と私立大学ではアウトソーシングの浸透スピードが違うなあと感じました。しかし、国立大学の方から「業者はどこがおすすですか」という質問が出ていたので、国立大学でも話題になっているんだなあ聞いていました。

私立大学においては専門的知識を持った図書館員という専任職員はますます減っていくと思います。そのような中で専任職員はどのような役割を担って働いていかなければならないのかと考えます。実務経験が無くとも環境の波に遅れることなく新たな業務を構築していかなければならない時代がそこまでやってきました。ネットワーク環境下では変化の波が速くて、ボヤボヤしているとすぐに置いてけぼりを食らってしまいますね。

あきやま・ちなみ（京都橘女子大学図書館）

第5回セミナーに参加して（感想3）

ネットワーク環境を生かすための標準化

「いらっしゃいませ！ 何人様でしょう？」「全部で10人」「お飲み物は？」
「生中8つとウーロン茶2つ」「お料理は？」「冷奴2人前、肉じゃが2人前、・・・」

村上 健治

居酒屋へいくと、だいたい上記のような手順で発注し、乾杯となります。

最初にお料理を発注し、その次に飲み物を発注するようなことは、あまりありません。そのようなことをすると、お店の人もとまどうことになるでしょう。少なくとも居酒屋では、飲み物→料理、という発注の順序がほぼ標準化されていますので、お店の人とお客との間の意思疎通がうまくはかれ、効率よく（発注）情報の交換がおこなわれるということになります。大阪でも京都でも東京でもこの手順にはあまり違いはないようです。標準とは便利なものです。

京都セミナー「ネットワーク環境下における図書館サービス」の最後を飾るのは、大綱さんのネットワーク環境下における標準と標準化に関するお話でした。その事例として出されたのがXML、Z39.50、ILLプロトコルでした。

居酒屋で日常的に見られることと同様、ネットワーク環境下で情報を交換する場合にも、それなりの決め事が必要になります。大綱さんは、それぞれをXML：データの形の取り決め。ネットワークでつながっている電算機と別の電算機との間でデータの意味の取違えをしないようにするための決め事（機械←→機械）

Z39.50：蔵書目録の検索手順の取り決め。異なる図書館の蔵書目録であっても、共通の手順で検索することができる。人間のもっている検索の意図とそれぞれの電算機でおこなわれる実際の検索との間の意味の取違えを少なくするための決め事（人←→機械）

ILLプロトコル：国際的なILLの取り決め。ネットワークを介した、人間と人間との間の決め事。電算機が間を介在するため、人と電算機、電算機と電算機との間にも決め事が必要になる（人←→（機械←→機械）←→人）

の3種類に類型化し、それぞれの段階での標準化の必要性を報告されました。

日本の大学図書館では、XML、Z39.50、ILLプロトコルのいずれも、まだまだ普及しているとはいえない状況ですが、「標準化」はネットワーク環境下で情報を効率よくさがすためには、なくてはならないものです。ネットワーク環境を活用するための基盤技術としての「標準化」の動向には、今後も注目しておく必要があると思いました。

むらかみ・けんじ（兵庫教育大学附属図書館）



第4回セミナー「メタデータと図書館」感想



大館 和郎

今回のセミナーで取り上げられたメタデータについては、外国でのプロジェクトや議論の紹介の記事はみかけるが、日本ではまだ一部の機関によって採用されている段階のようである。日本でメタデータの実用化（実装化）が一般化するのはまだこれからではないのかというのが率直な感想だ。欧米では様々なメタデータが開発されていることがわかったが、どんなに細かな規則を作っても、それを実際にうまく運用できるのかという思いがある。

標準化を目指すべきメタデータそのものが様々な団体によっていろいろと作られ、また改訂を加えられたりして相互運用性を確立するのが困難であるという指摘が今回のセミナーにおいてあった。

相互運用性というのは、あるコミュニティが開発・使用しているメタデータと隣のコミュニティが開発・使用しているメタデータをどううまくマッチングしてデータをやり取りするかということである。ここでコミュニティというのはメタデータを共有するグループという意味であり、メタデータの共有レベルがそれぞれ違っている。

共有レベルが狭ければ、ひとつの組織内で開発して使うことになり、もう少し範囲を広げれば、日本の図書館界全体で使おうとか、さらに、世界の図書館界全体で使おうということになる。さらに範囲を広げれば、例えば、Dublin Core というメタデータを共有するコミュニティ全体になる。

日本の場合、個別の機関が連合を組んでコミュニティを作り上げていくというより、どこか有力な機関がリーダーシップをとってコミュニティを形成していくというパターンが定着している。学術情報システムがその典型だ。そうならば国立情報学研究所がリーダーシップをとるのか。それとも国会図書館か、各種図書館団体か。

現実には、日本の大部分の大学図書館が業者パッケージソフトに依存している以上、業者が対応してくれるように働きかける必要があるが、そもそも標準的なメタデータというものがまだ確立していないのではないのかというのが今回のお話を聞いたうえでの感想である。Dublin Core が有力候補として挙げられそうだが、シンプルすぎるし、日本語には対応していない。

次にメタデータと MARC(機械可読目録)の関係について取り上げてみたい。これまで図書館は MARC と呼ばれるデータ形式でデータベースを構築してきたが、この MARC を取り込んだかたちでメタデータに移行するというのが現実的なプロセスだろう。

実際、世界最大の書誌ユーティリティ OCLC(Online Computer Library Center, Inc)は Dublin Core と従来の MARC データを統合する CORC(Cooperative Online Resource Catalog)プロジェクトを立ち上げている。このプロジェクトに日本から参加した図書館員の報告(*1)によれば、目録作成にあたって MARC21(旧 US MARC)か DC(Dublin Core)のどちらかを選択することになっているが、MARC から DC へ、DC から MARC へと Crosswalk と呼ぶ対照表ができていて、どちらで記述しても自動的に変換できるとのことである。

しかし DC で記述されたものはどのような詳細レベルであっても、MARC のかなり簡略された記述のレベルを更に下回る。もともと DC は情報専門家でない者でも容易に作成できる

ように少数の基本的要素のみを定義している。多くの図書館システムが、MARC フォーマットに対応して構築されているため、記述が簡単とされている DC でメタデータを作成しても、MARC で必須項目となっている書誌データは追加修正するように要望されているらしい。

それでは NACSIS-CAT を運営する国立情報学研究所はメタデータにどう対応していくのか。この点については、2000 年 12 月に電子情報資料を記述するための IDENT フィールドを新設したことのほか、新しい動きは今のところない。今回のセミナーではあまり取り上げられなかったが、日本の各図書館でのメタデータ作成の経験についてもっと知りたいと思った。

注 1) 鹿島みづき「CORC プロジェクトに参加して」

『情報の科学と技術』Vol.51, No.8, 2001.8 p.409-417.

おおだて・かずお (京都学園大学)

第4回セミナーに参加して (感想)



第4回大図研京都セミナー 2001 を受講して

中島 慶子

筆者「今、4月から月に一度京都に通っているの」(マルガリータを飲み干す)

友人「ふーん、おぬしもついに…！」(と、好奇心に満ちた眼差しでこちらを見る)

筆者「残念ながらそういうワケありじゃなくて、セミナー参加よ」

友人「えーっ、いつから新興宗教なんぞに？」

著者「違うってば。同業者で組織された研究会の有志勉強会とでもいうのかな」

友人「でも、京都でやるんだったらさあ、いろいろ観光してきたんでしょ？」

著者「とんでもない。セミナーが終わったらすぐさま日帰りよ、ブーメランみたいに」

友人「…アンタって、昔からそーゆーところ変わんないね」(カクテルの追加を頼む)

上記の会話は、標記のセミナー受講後、久しぶりに会った女友達との酒場でのやりとりの一部である。京都支部長の井上さんから思いもしなかった原稿依頼があり、はてどうしたものか考えあぐねていた折、気分転換と称して(これを心理学では逃避という)、飲みに出かけたという訳である。ここまではどうでもいい与太話である。

さて、今回のテーマはメタデータである。近年の大学図書館をめぐる動きとして、ネットワーク上の情報資源を記述し、それらを組織化する試みがなされつつある。なかでも、Dublin Core はインターネット上での情報資源の発見のために提案されている代表的なメタデータである。まず、大阪市立大学の北克一先生による講演はメタデータの広義の概念から始まり、メタデータ記述方法の定義について、実際の例をもとに説明がなされた。ついで、1995年に始まる Dublin Core が多様な情報資源に対する共通のコアメタデータの有用性を確認することから様々な議論を経て、1997年より15の基本項目を固定し標準化作業に着手、現在も

基本項目の検討が続けられていることが述べられた。

従来の紙媒体資料を対象とした目録規則に比べ、記述項目が少ないのは、Dublin Core が図書館以外の世界でも利用可能にすることを目的としていることもあろうが、インターネット上の情報が持つ特性、つまり図書や雑誌よりもはるかに増加が著しいことやデータ格納場所が変わりうるなどのデジタル情報特有の不安定な性格によるものであることが理解できた。そのため、情報の記録や維持管理にはかなりの困難が伴うことも容易に想像できる。

現在、職場での主要業務が図書の整理であるためか、抽象的な話を聞くのは久しぶりであり、正直なところ身近に迫った話題として感じられなかったが、確実にそう遠くない将来、単なる図書館界の話題としてではなく、現実の図書館サービスの一つとして手がけているだろうという予感はある。そのときには、今の大学図書館はどのような変貌を遂げているのだろうか？

なかじま・けいこ（豊橋創造大学附属図書館）



第3回セミナーに参加して（感想）

大図研セミナー『ネットワーク時代の情報リテラシー教育』に参加して

井上 雅人

大図研京都のセミナーはどの講義も、私の期待を上回る内容で、とても満足しています。とりわけ第3回目の『ネットワーク時代の情報リテラシー教育』は印象深いものになりました。というのは、私4月からサービス部門に配置換えになり、様々なデータベース講習会に関わることになったからです。新生ガイダンス、OPAC講習会など、無我夢中で取り組んできました。そして第3回のセミナーが開催された6月というのは本学が提供している『コアデータベース』の連続講習会がおこなわれた月でもあったからです。

以下では私が関わった講習会の経験も紹介しながら、セミナーの感想を述べてみたいと思います。

まず大城先生には大学教育の中での情報リテラシー教育、そして図書館の利用者教育の位置付けと21世紀の大学図書館の予測としてコレクション、組織化、利用者サービスの領域にわたって説明していただきました。これは私が関わった様々な利用者講習会を再整理する意味でとてもわかりやすく有益なものでした。これがまず一番の収穫でした。

特に印象深かったのは『わが国の大学図書館は、これまで伝統的な学生へのサービスを消極的な姿勢でやってきている・・・利用者が図書館に来て初めて・・・サービスする』というお話です。実は6月のコアデータベース（*1）講習会では日経テレコンや OCLC FirstSearch など6つのデータベースを1ヶ月かけて利用者に紹介しましたが、月の前半ではこれまでどおり、衣笠キャンパス内と図書館内の掲示とビラ配布、図書館のホームページでの広報だけでした。

その結果、参加者も20～30名という数字（図書館スタッフを含む）で終わりました。そこで後半で E-Mail を使って衣笠、草津両キャンパスのすべての構成員に広報することになりました。結果は申込者が殺到し、一時はメールによる対応に追われ、教室変更や講師の追加をおこなうほどでした。メール広報によって、ある程度申込みが増加することは予測できますし、問題点がないわけではありません。しかしながら、とにかく従来の図書館の広報よりは、『消極的な姿勢』から1歩前に出たことになるのではないかと、思っています。

次にセミナーで大城先生がご紹介くださった東京アメリカンセンターや OhioLINK、カリフォルニア州立大学の事例はとても貴重でした。本学ですでに実現しているものもありますが、多くは今後のモデルとして役にたつものばかりでした。また討論では京都大学の『情報探索入門』の経験から、教員との連携、協同が主なテーマになりました。

京都大学でも数多く問題をクリアして、あのような経験が生まれたわけですが、本学の実情に照らしてみれば、昨年からの国際関係学部において、図書館の OPAC やデータベースを駆使して情報を入手する取り組みが始まりました。また法学部では法律、判例データベースの利用は専門教育をおこなう上で必須となりつつあり、教員との連携は否応なしに進むと思えます。

これらは、まだ少数の教員にとどまっていますが、今後学部レベルで議論が進むような働きかけが必要になってきています。その時、図書館が情報リテラシー教育をどのようにとらえ、発展させていけるかが重要になってきていると思います。この意味でも今回のセミナーでのお話は私の期待以上のものでした。今後は各大学での経験をもっと広く交流する場がほしいと思っております。

(*1) コアデータベース

立命館大学総合情報センターでは、教育研究活動と極めて密接に関連し、進路・就職支援にも役立つものとしてコア・データベースを独自に選定し、WWW インターフェイスで利用提供しています。

日経テレコン21、OCLC FirstSearch、朝日新聞 DNA、Lexis-Nexis、Dialog Select、Proquest、Elsevier Scienec onsite などがあります。

講習会では法律・判例データベース（CD-ROM 版）も実施しました。

いのうえ・まさと（立命館大学総合情報センター衣笠メディアサービス課）

第2回京都支部委員会報告

日 時：2001年8月7日（火）19:00-20:30
 場 所：京都大学附属図書館3Fスタッフラウンジ
 出 席：赤澤、井上、大館、金森、呑海、吉田

【報告事項】

1. 会員情報 ・ 入会者2名

【審議事項】

1. 支部委員任務分担について
 2. 大図研京都セミナー2001について
 3. 9月以降の研修活動及び交流活動について
 4. 支部報について
- 次回支部委員会 9月4日（火）

